



平成25年度 活動報告書



(学生団体) 福島大学
災害ボランティアセンター



はじめに

ゼネラルマネージャー 神 貴大
(人間発達文化学類 4 年)

福大災ボラを設立してから 3 年が経とうとしている。また、2014 年 3 月 11 日で東日本大震災から丸 3 年となる。福島は一步一步立ち上がっているとは感じているが、一方で、まだまだ時間がかかると感じている。がれきの処理も終わらず、仮設住宅にも多くの方が住んでいる。また、メディアも震災関連の情報も県外では報道されなくなってきたようで、風化が進んできてしまっていることも時間がかかる要素の一つであると思う。

そうした中でも、福大災ボラは今年度も学生にできることを数多く活動してきた。

そもそも福大災ボラは、2011 年 3 月 11 日に起きた東日本大震災後、福島大学避難所の運営を経験した学生の「自分たち学生が福島のために何かできることはないか」というそれぞれの想いが団体の設立へとつながった。

私も福島大学避難所を運営していた学生の一人であるが、当時は 1 年生で 1 番下の学年であった。つまり、今年度 3 年生以下の学生は、震災時は高校生で、福島大学避難所のことを経験していなかったということになる。また、来年度から入学してくる学生は、震災当時中学生だったということとなる。そう考えると、震災直後の福大災ボラの想いと、現在ボランティア活動をしている学生の想いとは少なからず違っているのかもしれない。

しかし、今年度の活動を通して感じたことは、どのような活動であっても、それは福島の被災者の支援のためでもあり、被災地・福島の支援のためでもあるということである。それは、福大災ボラで活動している学生の学年を問わず共通の想いであると感じた。

その想いは、これからの世代に引き継いでいってもらいたいと思う。今年 1 年で後輩たちにどのくらい想いを伝えることができたかは分からないが、これからは福大災ボラとして、支援を必要とする声なくなるまで活動をしてもらいたいと思う。

この報告書は、今年度の活動をまとめたものである。それぞれの活動において、さまざまな想いが込められている。ぜひ、目を通していただき、「今の福島」を感じ、「これからの福島」に向けて考える 1 つのきっかけになっていただければ幸いである。また、活動を行う上で、さまざまな企業や団体、個人から多くの支援をいただいて活動を行うことができた。この場を借りて感謝申し上げる。

1. 被災地・被災者支援

○仮設住宅・借上げ住宅住民に対しての活動

【概要】

未だ福島市内の仮設住宅は、自分たちの土地に戻る見通しが立っていない現状がある。福大災ボラでは1年目はコミュニティ形成の支援、2年目は自治会の自立の支援を主な活動理念としてきた。3年目となる今年度は、今までの理念を継続しつつ、2年間でできた個人間での仮設の住民と学生のつながりから、個人的に困っていることのお話をしたり、支援を行ったりすることでより深めていくことを理念として行った。3年目になると、仮設での孤独死や1日中家にいるという人が生活の生きがいを無くしてしまい、鬱状態になるなどの問題が浮き彫りになってきたということが言われている。このような問題の要因としては、1、2年目は頻繁に仮設や避難している仮設の住民のもとへ活動支援しに来ていた団体が3年目となり支援の動きが弱くなってきたためである。そのため、仮設住宅でイベントが行われるときには外に出ていた人たちが、活動の減少により外に出る機会も減少してしまった。団体が来なくなってくる要因として、仮設住宅での支援を行っていた団体の規模が収縮してしまったり、主に助成金で活動していた団体が助成金の獲得が困難になってしまったりという理由などが挙げられている。そういった問題点を解決するためには、継続的な支援を行っていくことが必要であると私たち自身考え、地元の大学ということもあり、仮設住宅に何度も訪れ、仮設住宅の住人とコミュニケーションを図り、イベントを行うことによってつながりを強いものにしていこうと考えた。

春は花見や親睦会・バーベキュー、夏は夕涼み会、秋は芋煮会、冬はクリスマス会や望年会など、季節にあったイベントを仮設住宅の人々と共同で行い、仮設の中での人々のつながりを進め住人同士のコミュニケーションづくりを進めた。また、つながりづくりを進めていく中で、住人の心のリフレッシュも進めていった。

また1年目から継続して行ってきた足湯は、3年目になった今も住民との会話を大事にする傾聴ボランティアとして続けており、仮設の住人の心の拠り所を目指して活動をしている。心の拠り所とともに、3年目の今年度は足湯を行うことによって、住民たちが抱えている問題をより親身にとらえ、その問題をどのようにしていくかを考えるということを活動の目標として行った。

○被災地視察（富岡町/浪江町）

【概要】

東日本大震災が発生し、それと同時に、東京電力福島第一原子力発電所の事故が発生し、住民は避難生活を強いられ、原発から 20 キロ圏内の地域へは立ち入りの規制が出された。その後、除染活動による放射線量の減少に伴い、町ごとに区域再編が行われ、立ち入りの規制が緩和されていった。

2013 年 4 月には、富岡町と浪江町で区域再編が行われた。福大災ボラでは一度被災地を見て、どのような状況であるかと視察した。なお、浪江町へは、浪江町から避難をし、福島市内の仮設住宅で避難生活をしている熊田さんに案内をしていただき視察を行った。

- 【日付】 ・2013 年 4 月 6 日（土） 富岡町
・2013 年 4 月 20 日（土） 浪江町

【視察メンバー】

- （富岡町）福大災ボラ（鈴木教授、神、本間、樋山、田子）
一般社団法人 関西浜通り交流会（山内さん、土田さん）
（浪江町）福大災ボラ（鈴木教授、川村、神、菅野、佐藤）
熊田さん

【被災地を視察して】 神 貴大（人間発達文化学類 4 年）

震災から 2 年が経過した富岡町と浪江町の視察をして、その状況は衝撃的で言葉にならなかった。住宅地が並んでいた一帯は津波によって何もかもが流されてしまい、家が並んでいた場所とは思えない光景だった。また、震災から 2 年が経過したが、自動車は横転したまま、瓦礫は山のように積み上げられたままという状態であった。

2012 年 4 月に警戒区域が解除されている南相馬市小高区には、同年 5 月から何度も足を運んでいる。今もなお、瓦礫が山積みになっていたり、自動車も横転していたりしているため瓦礫撤去や家屋の片付け等を行っている。そう考えると、ふるさとで住んで生活するためにはまだまだ時間がかかってしまうと感じた。こうした事実は、あまり報道されなくなってきており、ニーズはあるがボランティアの数が減ってきているためなかなか作業が進まなくなっている原因の一つである。

被災地の現状を多くの知ってもらい、少しでも早く前に進めるよう情報を発信したり、実際に見てもらったりすることは必要なことであると感じた。

【被災地の写真】

○富岡町 (2014/4/6)



富岡駅改札



富岡駅ホーム



富岡駅付近



倒壊した住宅



森桜(この先帰還困難区域)



夜ノ

福島第二原子力発電所



高校付近側溝付近線量 6.72 μ Sv/h



海岸付近空間線量 0.372 μ Sv/h

富岡

○浪江町 (2014/4/20)



検問所



津波で何もかもながされてしまった



福島第一原子力発電所



ガードレール



請戸小学校体育館



請戸小学校教室



線量 12.65 μ Sv/h



大堀

大堀 側溝付近線量 19.99 μ Sv/h 以上

空間

○南相馬市復興支援ボランティア

【概要】

原発事故の影響で避難指示が出ていた南相馬市小高区は、震災から1年が経過した2012年4月16日に警戒区域解除となった。しかし、まだまだ住民が戻る環境ではなかった。私は2013年4月23日に小高区を訪れた。震災から2年が経過していても、震災当時からまったく変わっていない景色がそこには広がっていた。昨年度は津波被災地での活動が少なかったという反省から、今年度は継続的に南相馬市での活動を行った。現地では、南相馬市ボランティア活動センターで活動をコーディネートしてもらい、家屋の荷物運搬やビニールハウス解体、荒れ地の草刈り・清掃など多岐にわたる活動を行った。家屋の荷物運搬の際には、ネズミの死骸や腐敗した木片などが見つかри、震災当日から何も手が付けられていないという現実を真に受けた。これからも、継続的に活動を行う必要があると同時に、依頼者は何を求めているのかということにも焦点を当てて活動していかなければならないと思った。

【活動日】

4月23日、5月19日、31日、6月9日、16日、21日、
7月26日、9月8日、9日、10日、11日、12月5日 計12回

【活動場所】

南相馬市小高区、JR常磐線桃内駅

【協力・共催】

南相馬市ボランティア活動センター

【活動人数】

4月23日…15名、5月19日…14名、31日…3名、
6月9日…9名、16日…3名、21日…2名、7月26日…2名、
9月8日…9名、9日…8名、10日…7名、11日…7名(9月8～11日：高知大学から6名)、12月5日…16名

【内容・行程】

家屋荷物出し…家の中の使えなくなった物を外に出し、燃えるゴミ・燃えないゴミ・陶器類などに分別・回収し、トン袋に詰める。
ビニールハウス解体…ビニールを剥がし、鉄骨を土から掘り起こす。また、イノシシ除けのトタン板も土から掘り起こす。

【感想】

人間発達文化学類 4年 菊田 圭介

私は、今年度になって初めて南相馬を訪れました。津波被災地を初めて見たときには、正直言葉を失いました。歩道に飛び散ったがれき、流されて放置された車、手が付けられずに荒れ果てた家屋など、すべてが震災当時のまま残されていました。

私たちの活動は主に、家屋の荷物出しがメインでした。依頼された方の希望に沿って家の中の片付けを行いました。荒れ地の草刈りを行った際には、東京からボランティアでお越しになった飯野隊の方々と協力して活動しました。福島に住んでいるわたしたちでさえ、ボランティアに行くことに億劫に感じる人がいる中で、遠くから何時間もかけてボランティアに来ていただけて大変嬉しく思いました。

活動を通して、まだまだ津波被災地の復興には時間がかかるとともに、私たちはこの現実をより多くの人々に伝えていかなければいけないと感じました。そして多くの人に福島の現状を知ってもらい、震災のことを風化させないようにしなければならぬと思いました。また、私自身もこれからも被災地に継続的に足を運び、少しでも復興の力になりたいと考えています。

【活動写真】

5/19 飯野隊のみなさんとの活動



6/9 ビニールハウス解体



9/11 高知大の学生との活動



家屋の荷物出しの際に出た
瓦礫などを入れたトン袋

【参加者の感想】

○高澤啓太（福島大学 人間発達文化学類1年）

四季の里という開放感あふれる自然豊かな場所で親睦会を行うことができ、フレッシュな気分になりました。富岡町の方々はとてもお元気で、伝統的な踊りを披露してくださり、私もがんばろうという気持ちになりました。また、ある部首のつく漢字を挙げていくゲームにおいては、富岡町の方々が次から次へと漢字を挙げていくのを見て、度肝を抜かれました。災ボラの活動は初めてでしたが、とても有意義な時間を過ごすことができました。

【活動写真】





○夕涼み会

【概要】

福島市内は毎年、多数の熱中症がでており仮設住宅でもそれは例外ではない。そのため、気温が低くなってくる夕方から、仮設の住人が集まれる場所づくりを行い、季節に合った流しそうめんやスイカ割り、金魚すくいなどといった、仮設のお年寄りから子どもまで楽しめるコミュニティ形成を行っている。さらに NPO 団体との協力の下、ダムでの BBQ や散策も行った。

【日時】

2013年 8月11日(日)、8月17日(土)、8月24日(土)、9月14日(土)

【場所】

8月11日：旧松川小仮設住宅

8月17日：富岡町民間借上げ住宅さくらサロン（場所）飯坂町茂庭仮設住宅

8月24日：南矢野目仮設住宅

9月14日：上野台仮設住宅 計4カ所

【プレイスリーダーと参加人数】

旧松小仮設住宅：川村遼(地域政策科学研究科2年) 16名

富岡町さくらサロン：川村遼(地域政策科学研究科2年) 12名

南矢野目仮設住宅：本間美雪(行政4年) 48名(内33名は静岡県立大学)

上野台仮設住宅：尾形桃子(経済3年) 17名(内11名は高知大学)

計45名

【協力団体】

富岡町さくらサロン：(社)桑折町社会福祉協議会ボランティアセンター

NPO法人 いいざかサポーターズクラブ

NPO法人 市民公益活動パートナーズ,

南矢野目仮設住宅：静岡県立大学

上野台仮設住宅：高知大学

【活動内容】

旧松川小仮設 : 露店(金魚すくい、水ヨーヨーつり、かき氷、わたあめ、ポップコーン)、会場設営、花火補助

南矢野目仮設 : 流しそうめん、焼き鳥、すいか、レクリエーション(くじ)

富岡さくらサロン: BBQ、摺上川ダムインフォメーションセンターでダムの説明、ダムにて自由散策

【参加者の感想】

○富樫弘貴 (福島大学 行政政策学部3年)

8月11日、松川仮設住宅で行われた夕涼み会にボランティアとして参加しました。この時期はお盆に近いということもあってか、大勢の方が来てくれました。フラダンスを踊ったり、カラオケをしたり、酒を片手に焼き鳥をおいしそうに頬張ったりとみんな楽しそうで、私も元気をもらいました。私自身はかき氷を作りました。始めは慣れませんでしたでしたが、地元の人から教えてもらい最後にはきれいな形の物を作ることができました。

私は久しぶりのボランティアでしたが、住民の笑顔を見れて非常に良かったです。ありがとうございました。

【活動写真】

8月11日 旧松小仮設住宅



8月17日 富岡借上げ住宅



8月24日 南矢野目仮設住宅



9月14日 上野台仮設住宅



○芋煮会

【概要】

東日本大震災から3年目となり、県内各地の仮設住宅の中でもコミュニティが生まれ、自治会のつながりや近隣住民との交流が以前よりも増えている。そこで、当団体でも各仮設住宅に行き、自治会や住民と一緒に季節に伴った各種イベントの企画やその運営をサポートするなどの活動を継続させている。このうち、秋のイベントとなるのが「芋煮会」である。芋煮を食べながら参加者同士会話を楽しみつつ、ビンゴゲーム等のレクリエーションを行った。これらの活動も、今までのコミュニティ支援同様、あくまで、仮設住宅の住民と一緒にたくさん交流することを目標とした。特に“コミュニティの形成”と“人間関係の構築”、“心のリフレッシュ”をコンセプトに活動した。

【日時・場所】

- 10月6日(日)：旧松川小学校跡地仮設住宅
- 10月14日(月)：森合町仮設住宅
- 10月19日(土)：笹谷東部仮設住宅
富岡町民間借上げ住宅自治会
- 10月20日(日)：二本松市杉内仮設住宅
- 10月27日(日)：南矢野目仮設住宅

計6か所

【協力・共催】

- 笹谷東部仮設住宅：NPO法人アースウォーカーズより宮崎地鶏
- 富岡町民間借上げ住宅自治会：いいざかさポータークラブ市民公益活動
パートナーズ
- 二本松市杉内仮設住宅：気仙沼漁業協同組合より気仙沼産サンマ

【プレイスリーダーと参加人数】

- 旧松川小学校跡地仮設住宅：川村 遼 15名
- 森合町仮設住宅：大橋 矢 8名
- 笹谷東部仮設住宅：小島 望 12名
- 富岡町民間借上げ住宅自治会：川村 遼 8名
- 二本松市杉内仮設住宅：佐藤 洋彰 15名
- 南矢野目仮設住宅：菅野 勇希 16名

計74名

【活動内容】

旧松川小学校跡地仮設住宅：一緒に奉仕作業（草とり）、芋煮、おにぎり

森合町仮設住宅：カラオケ、芋煮

笹谷東部仮設住宅：芋煮、カレー、地鶏

富岡町民間借上げ住宅自治会：ビンゴゲーム、芋煮、サンマ

二本松市杉内仮設住宅：カラオケ、芋煮、サンマ、おにぎり

南矢野目仮設住宅：抽選会、芋煮、おにぎり、焼き鳥、焼き芋

【感想】

人間発達文化学類 1年 手代木 巧紀

私は10月20日と10月27日の芋煮会に参加しました。10月20日の二本松市杉内仮設住宅では、気仙沼産のサンマとおにぎり、芋煮を一緒に作って美味しく食べました。肌寒かったので芋煮が体にしみました。今回被災地交流として気仙沼漁業協同組合様から新鮮なサンマを提供していただきました。これからも被災地交流を継続していきたいです。それから、カラオケを住民の方々とみんなで楽しく盛り上がりました。高齢者の方々が中心でしたが、会長さんをはじめ皆さんとても明るく元気があって私たちも元気をもらいました。次に、10月27日の南矢野目仮設住宅では、気持ちの良い秋晴れの中芋煮とおにぎりと焼き鳥、焼き芋を協力して作り美味しくいただきました。住民の人たちが朝早くから張り切って準備してくださったので、多くの人と長い時間交流できて良い雰囲気の中実施することができたので良かったです。

この活動を通して、仮設住宅ごとに仲の良い関係があり助け合って生活をしていることを知ったので、近所に住む人たちとのコミュニティの形成は生活するうえで必要不可欠なものであると感じました。これからもこのようなイベントなどで若い力がある学生にできる事を少しずつ取り組んでいきたいです。

【活動写真】



10/6 旧松川小学校跡地仮設住宅



10/14 森合町仮設住宅



10/19 笹谷東部仮設住宅



10/19 富岡町民間借上げ住宅自治会



10/20 杉内仮設住宅の集合写真と気仙沼産のサンマ



10/27 南矢野目仮設住宅

○クリスマス・望年会

【活動概要】

福大災ボラでは毎年年末に望年会という交流会を地域の方々と行っている。今年度の新しい取り組みとしては仮設住宅でのクリスマス会があった。通常の活動では足湯や交流会といったどちらかというとお年寄りメインの活動をしてきたが、クリスマスは子どもたちに楽しんでもらいたいという思いから子ども中心のクリスマス会を企画した。主な内容はキャンドル作り、ケーキ作り、ビンゴゲーム、子どもへのプレゼント配布などを行った。また相馬基地のクリスマスイベントでは絵を描いたりするほかバルーンアート、風船プール、ボール投げで遊んだ。また例年行事として望年会を行った。普通年末行事といえば「忘年会」ですが、福大災ボラでは「望年会」と題して来年も良いことがあることを望んで交流を深め、みなさんで楽しもうという行事である。望年会の主な内容はもちつき、年越しそば、オードブル、カラオケなどで楽しんだ。この時期は寒さで引きこもりがちになる時期であるが、福大災ボラではこういった年末行事を通して避難されている方々とのつながりを再確認する場とし、互いの発展を図っている。今後も年末行事として活動を続けていきたい。

【各活動】

- 12月7日 米沢クリスマス会（米沢市内） 4人
- 12月22日 クリスマス会（旧松川小仮設住宅） 10人
- 12月24日 クリスマス会（笹谷東部仮設住宅） 16人
- 12月28日 望年会（旧松川小仮設住宅） 11人
- 12月29日 望年会（杉内仮設住宅） 15人

【協力・共催】

竹内 躍人

【感想・考察】

季節のイベントを通してみなさんの活気と笑顔にふれることができました。そしてそこから沢山のパワーをもらいました。ベテランのお母さんたちに大福のあんこの包み方やもち米の蒸らし方など、直接体験することでしか学べないいろいろな知恵や技術を教えていただきました。（福大学生）

こどもたちが楽しそうにツリーに飾りつけをしたり、風船で遊んでいるのを見てとても嬉しかったし、何より終始元気いっぱいな彼らを見て、私も元気になりました！親御さんも遊んでいるこどもたちを見

て喜んでいたので印象的でした。(福大学生)

福島滞在中は多くの方々と出会い、その人柄、思いに強く心惹かれている自分が今います。「この場所にまた行きたい」「あの人たちにまた会いたい」このような気持ちが込み上げてきます。そんな素朴な、かつ強い気持ちがある限り、これからも自分と福島との縁は繋がっていく。京都という、福島から遠く離れた土地からではありますが、今回の経験を広く自分の周囲へと広げていきたいと考えています。(他大学生)

【活動写真】



12月24日 クリスマス会 (笹谷東部仮設住宅)



12月28日 望年会 (旧松川小仮設住宅)



12月29日 望年会 (杉内仮設住宅)



○高齢者サポート拠点「あづまっぺ」でのサロン活動

【活動概要】

松川第一住宅にある高齢者サポート拠点「あづまっぺ」において松川第一仮設住宅、松川第二仮設住宅に避難している方々を対象に、健康維持や住民同士の交流を目的として開催された。仮設住宅の住民の方の意見を参考に学生でイベントを企画し、住民の方と協力する形でイベントを作り上げた。

【活動内容】

■平成 25 年 5 月 29 日

ボーリング大会(場所：二本松ルミックスボウル)4名参加

■平成 25 年 8 月 3 日

流しそうめん(場所：松川第一仮設住宅集会所前)7名参加

■平成 25 年 10 月 29 日

芋煮会(場所：松川第一仮設住宅集会所前)20名参加

■平成 25 年 12 月 7 日

カラオケ大会(場所：松川第一仮設住宅集会所)2名参加

■平成 25 年 12 月 11 日

まつぼっくりクリスマスツリー作り(場所：サポートセンター「あづまっぺ」)8名参加

【感想】福島大学 4 年 渡邊知佳

去年から関わらせていただいている「あづまっぺ」の活動に今年も継続して携わった。2年目ということもあり、学生と住民のみなさんとだいぶ顔なじみの関係になったことで、全ての活動が学生と住民のみなさんで一緒に作り上げる笑顔あふれる活動となっていた。仮設に住む住民のみなさんから「学生がきてくれるのが嬉しい」という声をたくさんいただき、ボーリング大会やカラオケ大会は「あづまっぺ」の職員さんや仮設住宅自治会の方から学生がお誘いいただくかたちで開催されたのも去年と違う点であり、わたしたち学生ボランティアの存在意義を感じることもできる、とても嬉しい出来事であった。今年度の活動で特に印象に残っているのが、12月に行われた松ぼっくりでクリスマスツリーを作るというイベントである。今までの活動に比べると少ない参加者だったのだが、あまり手の動かないおばあちゃんが参加してくれたのである。誰しも自分の苦手なことや出来ないことはできるだけ避けてしまいがちだが、そのおばあちゃんが私の配ったチラシをみて、ツリーを作りたいという思いで参加してくれたのがとても嬉しかった。学生ボランティアがそのおばあちゃんに話しかけながら、一緒にツリーをつくりあげ、完成したツリーをみて嬉しそうに笑うおばあちゃんの笑顔がとても心に残っている。小さいイベントではあったが、参加者のみなさんとじっくりお話をし、1人1人とゆっくり向き合えたこ

のイベントはとても有意義なものであった。それぞれの活動で、いつも優しく出迎えてくれる仮設住宅のみなさんや、物品準備から場所の提供まで幅広く協力してくださった「あづまっぺ」の職員さんには本当に感謝している。本当にありがとうございました。「あづまっぺ」で築き上げたこの繋がりはこれからも大切にしていきたいと強く思う。



3. 子ども・家族支援

○ふくしま子どもリフレッシュスキーキャンプ

【概要】

震災から2度目の冬休みを迎えてもいまだ放射線の不安は拭えず、子供たち・保護者が日常生活の中で放射線のストレスを抱えることには変わりはありませんでした。また雪遊びを控えるように注意されているという声を、仮設住宅の子どもたちからも聞いていました。その中で、微力でも自分たちにできることをやりたいという思いの下、リフレッシュスキーキャンプを行いました。今年も昨年と同様に関西大学スキー同好会「ZOO」OBの皆さんの協力を得て企画をしました。またサマーキャンプを共催していただいた日本福祉大学の学生・教職員の皆さんにも協力していただきました。

【共同パートナー】・関西大学スキー同好会「ZOO」OB

- ・日本福祉大学災害ボランティアセンター

【場所】長野県 黒姫高原

【期間】3月29日（金）～31日（日）

【内容】スキー、レクリエーション

【参加スタッフ】・福島大学生 12名

- ・福島県立医科大学生 3名
- ・日本福祉大学生 4名
- ・福島大学行政政策学類教授 鈴木典夫
- ・日本福祉大学 教職員
- ・関西大学スキー同好会「ZOO」OB 8名

【行程】

- 3月29日（金） 10:00 福島駅・郡山駅出発
〈バスで移動〉（途中、新潟「せんべい王国」にて工場見学）
17:00 長野県 黒姫高原ホテル到着
- 3月30日（土） 午前 スキー
午後 スキー
そりすべり競争

3月31日(日) 午前 スキー
午後 ホテル出発
(バスで移動)
18:00頃 福島駅・郡山駅着

【学生の声】

○鈴木亜衣(人間発達文化学類2年)

私はリフレッシュスキーキャンプにおいて班つき、及びスキー班の中級班につく学生スタッフとして参加させていただきました。私自身、当時は1年生で、福島大学災害ボランティアセンターの活動に参加すること自体が初めてで、何もわからない状態でのスタートでした。正直、初めて参加する活動がキャンプというとても大きな企画だったため、私は役に立つだろうかと不安でした。しかし、準備の段階からみんなが明るく親切にしてくれて、私の不安は一気に吹き飛びました。準備が進んでいくにつれてキャンプ本番に向けての期待は大きくなり、スタッフ全体としてのチームワークも確立していきました。

初めて子どもたちと出会ったときは緊張した面持ちの子が多くいましたが、バスの中で様々なことを話したり、新潟県のせんべい王国で班の子ども達と交流を図ったりしながらだんだんと馴染んでいく子どもたちの姿にはとても安心しました。

メインとなるスキーは、福島県全域から参加者を募っているため、経験の差が確かに存在しました。しかし、レベル別にしっかりチーム分けをし、関西大学スキー部OBの方々に指導をしていただきながら、子どもたちはそれぞれ自分なりに上達を実感しながら思いっきり滑っている様子が見られました。私自身、中級班には属していたものの、スキーをするのは小学生ぶりだったため、子どもたちをうまくサポートできるかは心配の種の一つでした。しかし、子どもたちの心から楽しむ顔を見るために、安全確保にまず気を配りながら出来るように心がけることができました。

他のレクリエーションとしてのそり滑りやビンゴ大会でも、子どもたちが夢中になって楽しむ姿を見ることができとても安心しました。

一つの班を担当していたからか、自分の班以外を見ることができていないことがあり、もっと視野を広くしなければ、という反省点を感じています。しかし何よりも、子どもたちがのびのび遊ぶ姿に直接一緒に関わることができてとても満足しています。子どもたちが最終日、笑顔で家に帰ることができたのも、スタッフ一人ひとりがそれぞれ責任を持ち行動できたことの現れだと思っています。また、子どもたちの笑顔を見るために準備に携わってきましたが、結局は自分が子ども達と一緒に楽しむことで、子どもたちも同じ気持ちになることができたということも言えるのではないかと思います。

この度、スキーキャンプに参加させていただいたことで、多くの先輩や同学

年のスタッフとのつながりができたのも私にとって大きいことの一つであり、今回のメンバーで一つの充実したキャンプを作り上げることに携わることが出来て、本当に嬉しく思います。また、今後の“災ボラ”の様々な活動にも参加していくきっかけにすることができました。

このスキーキャンプにお世話になった全ての方々に深く御礼を申し上げます。ありがとうございました。

○宮脇 由佳（日本福祉大学2年）

キャンプはあっという間でしたが、スタッフと子どもはすぐに打ち解け、スキーを通して春休み最後を楽しんでもらえたと思います。

スキーは、教わるというより、ただ滑っただけだったので、スキーをしながらゲームをしたり、スキーをしながらレクリエーションをしたり、友達のがんばりを見あったり、子ども同士が接し合えるようなスキーのやり方もあったと思いました。休憩する場所を統一して、おやつタイムや、子どもたちが会話できる場をつくりたかったと思いました。

本部とリーダーの連絡もうまく通って、子どもたちへの指示も明確にわかりやすく伝わったと思います。しかし、お昼になるたびに、レンタルじゃない子はスキー板を運ぶ作業は、不必要だったと思います。

今回のキャンプでは、たくさんの子どもの関わる時間をたくさんもてました。子どもと関わって行く中で、受け入れるということを大切にしました。甘やかすわけではありませんが、悪いことは悪いときちんと理由を添えて伝えることができました。受け入れることは、共感することだと思いました。共感しながら、自分がオープンで子どもたちと関わることで、子どもたちもオープンになってくれる様子がよく見えました。

○根本 ひかり（福島県立医科大学2年）

キャンプ当日は、私は子供たちに楽しんでもらえていたと思うのでとてもよかったです。特にビンゴは班のメンバーとの一致 団結に大きく貢献したのではないかと思います。

子どもたちと関わってみて思ったのは、素直な子ばかりだなということです。最近の子どもはませていると聞いていたのでどのような感じなのかと思っていましたが、まだまだみんな子どもらしくてかわいかったです。たくさん名前を呼ばれて、たくさん話しをして、たくさん遊んでとても楽しかったです。

【活動写真】



せんべい作り体験



そり競争



スキー教室



ビンゴ大会



スキー場で集合写真

○ふくしま子どもリフレッシュサマーキャンプ

【概要】

いまだに放射能の不安は拭えず、外での遊びを制限されている状態が続いている。

また福島県内の子どもたちの肥満児率が高まってきている。そこで今回のキャンプは外で遊ぶことでのストレスの解消、それに加えて運動不足の解消を目的にした。今年も日本福祉大学と共同で実施し、愛知県南知多へ福島県の小学生を招待することとなった。

【協働パートナー】 日本福祉大学災害ボランティアセンター

【期間】 8月19日（月）～23日（金）4泊5日

【場所】 愛知県 名古屋市・南知多方面

【内容】 海水浴、バーベキュー、花火、水族館観光、地引網体験、など

【参加スタッフ】

- ・福島大学生 20名
- ・日本福祉大学生 20名
- ・福島大学行政政策学類教授 鈴木典夫
- ・日本福祉大学教職員
- ・棚木良子さん（看護師）
- ・安部靖子さん（看護師）

【行程】

8月19日（月）7:30頃 いわき・会津若松・郡山・福島駅出発

13:00 仙台港フェリー出発

8月20日（火）10:30 名古屋港着

11:00～14:30 ナガシマスパーランド

15:30 ホテル到着

16:30 ビーチハイク

8月21日（水）9:00 地引網漁体験

10:00～14:30 海水浴（内海海水浴場）

16:00～20:00 バーベキュー、花火

8月22日（木）9:30 ホテル出発

10:00 中部国際空港にておみやげ購入

12:00 名古屋港水族館到着
15:00 名古屋城到着
19:00 名古屋港フェリー出発
8月23日(金) 17:00 仙台港出発
19:00頃 郡山・福島駅着

【学生の声】

○沼田 亜紀（行政政策学類2年）

私は昨年8月、福島大学災害ボランティアセンターの一員として、毎年恒例のリフレッシュサマーキャンプに参加しました。このリフレッシュサマーキャンプとは、簡単に説明すると福島県内の子どもたちに、遊びや活動を通して集団行動の大切さや様々な事柄について学んでもらうというものです。

私は大学に入学するまでボランティア活動にあまり積極的に参加したことがなかったので、大学に入り今までしなかった新しいことにチャレンジしたいと思い、参加してみました。ボランティア当日になり、子どもたちと仲良くなれるのかとても不安でしたが、予想とは裏腹にすぐに子どもたちと打ち解けることが出来ました。福島から名古屋に向かう間、たくさん子どもたちと接していくうちにパワフルな子どもたちには本当に感心しました。名古屋に着いてからは海で遊んだり、名古屋城などの名所を訪れたりしました。終始子どもたちは感心していましたが、やはり子どもらしい部分も多かったので時には厳しくすることも必要でした。私自身子どもは大好きなので、つい甘やかしてしまいそうになりましたが、時と場合に応じて接し方も変えていかなければならないことを学ぶことが出来ました。改めて、子育ては本当に大変なことなのだ実感しました。

私はこのサマーキャンプで様々なことを学びました。最初は不安しかありませんでしたが、良い先輩や友人のおかげで終始楽しく、有意義な時間を過ごせたと思います。ボランティア活動は絶対に自分の人生においてプラスになることだと思いますし、これからも機会があれば自ら積極的に参加していきたいなと思います。

【活動写真】



フェリーにて



地引網体験



遊園地



海水浴

○相馬基地子ども支援イベント

活動概要 : 相馬基地インドアパークにて子ども達(相馬基地を利用する家庭、未就学児)との創作イベントを行う。相馬基地利用者(子ども・保護者)に楽しんでもらうと共に、利用者同士のコミュニティ形成の補助を図る。

活動日 : 以下の7日で行った。
4月24日(水) こいのぼりアート
6月15日(土) 父の日似顔絵イベント
9月28日(土) 秋のお絵描きイベント
10月5日(土) 新聞紙遊びイベント
10月26日(土) ハロウィン仮装イベント
11月2日(土) 相馬基地秋祭り
12月7日(土) クリスマスツリーの飾り付け

開催地 : 相馬基地インドアパーク(福島県相馬市粟津)

主催 : 一般社団法人 Bridge for Fukushima
※今年度の活動において、福大災ボラは「協力」という形で活動させていただいた。

活動人数 : 4月24日(水) 2名
6月15日(土) 4名
9月28日(土) 3名
10月5日(土) 2名
10月26日(土) 3名
11月2日(土) 5名
12月7日(土) 7名

内容 : それぞれ以下の通りである。

(1) こいのぼりアートイベント

こいのぼりの形に切った白い無地の布にクレヨンなどで自由に絵を描き、その後完成品をインドアパーク内に飾った。

(2) 父の日似顔絵イベント

画用紙にそれぞれのお父さんの似顔絵を描いてもらい、そのまま持ち帰ってもらい父の日のプレゼントにしてもらった。

(3) 秋のお絵描きイベント

壁に貼った大きな紙に、「秋」をテーマに絵の具で手形を押したり絵を描いたりした。

(4) 新聞紙遊びイベント

新聞紙を使って体を動かす遊びなどを行った。

(5) ハロウィン仮装イベント

ポリ袋や画用紙などの素材でハロウィンの仮装衣装を一緒に作り、それを実際に参加した子どもに着用してもらった。ポラロイドカメラで記念撮影後、出来上がった写真とお菓子を子ども達にプレゼントした。

(6) 相馬基地秋祭り

相馬基地インドアパーク内に子どもが遊べるゲームコーナーなどを設置し、同時にわたあめやポップコーンも振る舞った。

(7) クリスマスツリーの飾り付けイベント

壁に貼った大きな紙に絵の具などでクリスマスツリーを描き、それに紙や風船で作った飾りを付けた。

感想 : 小西智枝美 (現代教養コース4年)

今年度は相馬基地での活動を継続して行うことができました。その中には家では出来ないような内容の活動もいくつかあり、参加した保護者の方から「やってくれてありがたいよね」という声をたくさんいただくことが出来ました。また、ボランティアスタッフとして参加した私たちの方がかえって元気をもらえるほど、子ども達の笑顔や元気な声をたくさん聞くことが出来ました。活動を実施するにあたり、ご協力いただいた方々に心より感謝いたします。

主催団体 一般社団法人 Bridge for Fukushima より :

Bridge for Fukushima は福島県の抱える課題を解決するため、県内外の Bridge (かけはし) になる活動を行っている NPO です。事業の柱の一つである相馬基地では相双地区に住む乳幼児を放射能の不安から守り、安心して子育てできる環境を整え、子育てするお母さんのネットワーク構築を目的として、900 世帯以上の方を対象に活動を行っています。中でもお母さん方の要望が非常に高かった屋内の遊び場を今年度4月より本格的にオープンし、現在も多数の親子が利用されています。福島大学災害ボランティアセンターに、子ども・親子向けのイベントを実施していただき、インドアパークに沢山の笑顔が生まれ利用者も増え、コミュニティも拡大することが出来ました。学生と接する機会が子どもにとって良い影響になると保護者の方から、これからもこのようなイベントを続けて欲しいという声も数多く頂きました。来年度以降も福島大学災害ボランティアセンターと協働して様々な事業を行っていきたくと考えております。

活動写真



○南相馬市小高区学習支援フリースペース

【活動概要】震災から3年が経とうとしている現在も南相馬市小高区の小中学生は仮設校舎での授業を続けている。特別教室は無く、校庭や体育館も間借りして、毎日の生活を送っているという現状である。そこで、長期休業を利用し学び&遊びの場を設け、少し年の離れた大学生との関わりの中で子ども達の心身のリフレッシュや勉強に対する意欲を高められればと小高区小・中学校児童生徒親の会が企画し、災ボラで協力した。保護者の方や参加してくれた小中学生からの評判も良く、2013年の冬の開催で4回目を迎えた。

【期間】夏季休業 平成25年8月1日～10日 計10日間
冬季休業 平成25年12月21日～27日 計7日間

【場所】南相馬市鹿島区万葉ふれあいセンター(南相馬市鹿島区寺内字迎田22)
小高小学校仮設校舎

【協力・共催】小高区小・中学校児童生徒親の会、相馬市観光協会

【活動人数】夏季：災ボラ7名、明治15名、青山学院2名、仙台白百合7名、福島県立総合衛生学院2名、慶応義塾1名、上智1名、創価1名、帝京1名、中央1名、社会人2名
福島大学行政政策学類教授 鈴木典夫
冬季：災ボラ28名、明治6名、福島総合衛生学院3名、関西外語大2名、京都薬科大2名、中央2名、創価1名、慶応義塾1名、上智1名、京都女子大1名、県立医大1名、仙台白百合1名、帝京1名、東農大1名、立命館1名、社会人1名、
福島大学行政政策学類教授 鈴木典夫

【内容】子ども達の学習支援・遊び支援
(夏季)3日：野外活動@アグリパーク、8日：クレープづくり
最終日：バーベキューの提供
(冬季)25日：クリスマス会、26日：お菓子づくり
最終日：餅つきの提供

【感想】

・井島順子(小高区小・中学校児童生徒親の会代表/相馬市観光協会)

コミュニティーが壊れ不自由な生活環境の中、子供達の安心・安全な居場所を提供し、避難や仮設校舎に拠る不便な学習環境を強いられ不足がちな学力の補助及び学習指導をメインに行っている。加えて、徐々に増えてきている精神的なストレスの開放や体力回復にむけて運動する機会を与え、広い視野で自分の将来について考えてほしい親の思いから立ち上がったこの活動もやっと軌道に乗ってきたように思える。昨夏の1回目は参加人数も少なく、手探りでの開講だったが、今冬で4回目をむかえて、ボランティア学生、受講人数も増え、内容も充実してきた。調理実習室を利用し、夏にはクレープを作り、冬にはクッキーを焼き楽しむこともできた。進学意識の向上と将来の展望について、現役大学生と触れ合い、学習計画の立て方や、問題集を使った効率的な勉強の仕方、楽しく集中して学ぶことを感じとってきている。

大学生の要請、移動費及び滞在費、開講案内等の経費を賄うため、地元企業数数社の協賛金、赤い羽根共同募金住民支えあい活動助成金の申請、南相馬市教育委員会の後援による「まちづくり活動支援事業」を利用して、資金調達にも奔走した。

また、学習面だけでなく、友達を失った子供達が学校をこえて友達を作り、学年をこえて、規範意識の高揚や協力、そして思いやりの心が育まれてきた。大学生達に臆することなく触れ合い、進学に対する意欲や勉強する姿勢が徐々に改善されてきたのは嬉しい限りだ。さらには、ボランティア学生達同士の交流も計られ、福島を・・小高を知らなかった学生達が、実情を認識し、広く現状を広報していく手助けにもなっているようだ。

課題としては、小学生の割合が高く、今後受験を控えた中学生への浸透と保護者の理解を深めていくとともに、ボランティア学生も理系・文系バランスよく集めて、継続的に行っていきたいと考える。

最後に、わざわざ南相馬市まで足を運んで頂き、バーベキューや餅つきのイベントを企画していただくと共に、沢山のボランティア学生を派遣していただいたことに心から感謝申し上げます。未来を担う子供達が、健やかに成長し、いずれは地元の発展の基盤となるような人材・心身の育成を目指していく所存ですので、今後ともよろしく願いいたします。

【参加者より】 中央大学 植竹さおり

フリースペースには2012年の夏、2013年の夏、冬の3回参加しています。

もともと震災後に、故郷の福島の子供たちのためにできることはないだろうかと考えていた時に、お話をいただいて、迷わずに参加を決めました。

初めて子供たちに会ったとき、「私は何も知らなかったんだな」と思いました。中通りの郡山の出身なのに、津波のあった地域のことや、原発から近い地域ことは、同じ福島でもほとんど得られる情報がなかったことを、この時に初め

て知りました。

丁度、最初の参加の前に自分の母校をまわり、子供たちが将来やりたいことや、今夢中になっていることを尋ねていました。同じ福島県で、放射線量も高いと言われている郡山市の子供たちは、学習環境は震災前とほぼ変わらない状態に落ち着いていて、子供たちの心には、将来のことを考える余裕と、選択肢がありました。

初めてフリースペースで子供たちと話していたとき、「やりたいことなんて、わからないよ。習い事を教えてくれる先生は避難していなくなったし、勉強もついていけない。部活が満足にできる場所もない。やりたいと思ったところで、できっこない。」という声を何度も聞きました。とてもショックでした。可能性で溢れている子供たちが、できっこないっていろんなことを諦めてしまう環境に置かれていること、それを知らなかったこと、どちらも悔しくて、恥ずかしくて、悲しかったのです。

しかし、数日間一緒に勉強したり、遊んだりしているうちに、ようやく固い表情だった子供たちが笑えるようになってきたことに気づきました。自分自身のことを語り出せるように、少しずつなってきたことを感じました。保護者の方たちも、驚いていました。

大学生がほとんどいない地域らしく、大人でも、子供でもない、お兄ちゃんお姉ちゃんとお会うことはとても大きな影響を与えていたのだと思います。自分のことを思い返してみたら、子供の頃は世界が学校と家庭しかなくて、選択肢も、可能性も、その中で見いだせるものは限界がありました。人と出会うほど、いろんな可能性を持っている人に出会うほど、自分の可能性も、どんどん広がっていく。それを思い返しつつ、実感しました。

2013年の夏と冬と参加したとき、子供たちが前に会った時よりも、どんどん生き生きしていることがすごく嬉しくて。めいっばい笑う姿は、初めて訪れた時には見るができなかったものだなと思いました。そして、嬉しかったことは、子供たちに「やりたいこと」がそれぞれにできていたこと。「やりたいこと」を探したいと思えるようになったことです。

私は音楽をやっているので、一緒に歌ったり、ギターを教えたり、子供たちが好きな曲を練習して歌ってみたりしました。また、2013年によくできた仮設校舎では、理科室と家庭科室が、水も火も使えないと聞いたので、フリースペースを行う万葉センターで夏に、クレープ作り、冬にクッキー作りをしました。保護者の方たちや、他の仲間たちの協力があって、本当に実現できたことが嬉しかった。子供たちが、そういった調理実習みたいなものや、夏のバーベキュー、冬のクリスマスパーティー(これも大阪からのご支援があって実現できました)、そして、餅つきも、本当に楽しんでくれていて、大人たちが泣きそうでした。

個人的には、福島の子供達と関わっていきたくないと決めた時に作った「美しい

もの」という歌を、子供たちが一緒に歌ってくれたり、聴いたりしてくれていることが嬉しくて、嬉しくて、しかたありませんでした。

私にできることは、本当にわずかなことだけれど、子供たちの可能性がどんどん、広がっていったら素敵だなと思います。子供たちの一人ひとりが自分自身に可能性を見出して、自信を持って生きてほしい。そんなお手伝いができたらな、と思います。

【参加してくれた中学生より】

私は、初回からフリースペースに参加しています。第4回目の今回は、受験生ということもあり、特に苦手な教科を大学生に教えてもらいながら勉強しました。私達は、勉強の他にも、大学の仕組みや将来のために何を学ぶべきか、また人と人の繋がり大切さなど、たくさんを教えてもらいました。大学生と話していると、自分の知らない世界がどんどん見えてきて、とてもわくわくします。大学生同士が、フリースペースを通じて初めて出会い、仲良くなり、次回新しい友達を連れて参加する。そして、人数が増えると新しいことにチャレンジができる。そうして、どんどんと輪が広がり、出来ることも増えてくる。私は、大学生が教えてくれた、人と人の繋がりが、いかに大切かを実感することもできました。大学生は、一緒に話して、遊んでくれる兄弟、時には勉強を教えてくれる先生のような存在です。大学生と一緒に過ごす日々は、とても短いのですが、一秒一秒がとても刺激的でした。私は大学生に教えてもらったことを生かしながら、受験勉強のラストスパートを頑張ります。

【活動写真】





○集まれ!!ふくしま子ども大使

【概要】

震災から3年が過ぎようとしており、震災に対しての風化が進んでいると感じている。そこで、風化防止と安全性PRの観点から、全国の子どもたちに福島でのキャンプを呼びかけもう一度全国の皆さんに福島について考えてもらうきっかけをつくることを目的とした。またもう一つの観点として、福島の子どもたちと全国の子どもたちのつながりをつくることも目的とし活動を行った。

安全性の面を考慮し、活動地は会津、各活動場所の放射線量を事前に測定し行った。

またこの活動は、アサヒグループホールディングスとJTB東北の方々にも協力をしていただき産学共同プロジェクトである。

【活動期間】

8月16日～8月19日

【活動場所】

活動場所：会津若松市内

宿泊施設：リステル猪苗代

【協力・共催】

アサヒグループホールディングス、JTB東北、リステル猪苗代、会津若松市内の観光施設、大熊町の仮設住宅のみなさん

【活動人数】

〈学生スタッフ〉

福島大学12名、明治大学2名、関西大学2名、高知大学2名、熊本学園大学3名（計21名）

〈参加者〉

福島12名、関東8名、関西1名、四国7名、九州4名（計32名）

【内容・行程】

◆1日目

移動

はじめましてのつどい

◆2日目

仮設住宅訪問（大熊町扇町仮設住宅、大熊町松長近隣公園仮設住宅）

会津観光（飯盛山散策、あかべこ絵付け体験、鶴ヶ城見学）

◆3日目

カヌー体験・磐梯噴火記念館見学・五色沼散策

学生企画スタンプラリー

飯盒炊爨・カレー作り

さよならのつどい

◆4日目

移動

【感想・考察】

《参加者からの作文より》

・関東/小5女子

「いろいろな人に福島の魅力について知ってほしいと思いました。一つ目の魅力は景色がいい所がたくさんあることです。二つ目の魅力はみんなとの支え合いです。最後の魅力は歴史です。」

・関東/小4男子

「二つ気づいたことがあります。一つ目は友達を大切にすること。二つ目は被災地の人達を思って生活することです。」「福島ของ素晴らしさを東京のみんなにも伝えたいと思います。」

・熊本/小5男子

「一番仲良くなったのは同じ班の人です。たくさんお話をしたので方言の『ぺ』が移りました。また一緒に遊びたいです。」

《他大学スタッフからよせられた感想より》

・熊本学園大学4年生 橋本 朋佳

今回の企画は小学生が中心でしたが、私たち学生も沢山学ぶことができました。福島は他県の被害とは違い、原発という問題により復興が遅れていますが、そこで生活する人々の笑顔にはとても力強いものを感じました。熊本に住む私たちが出来ることは、多くの情報が行き交う今の社会で正しい情報を得られるように、福島や東北の事に関心を持ち続ける事だと思います。

・関西大学3年生 法心 沙也香

キャンプのプログラムはしっかり福島の現状を学ぶところは学んで、遊ぶところはいっぱい遊んでと、メリハリがしっかりついて子どもたちにとってとてもいいプログラムだったのではないかと思います。将来を担う子どもたちには今回のキャンプがなにか彼らの人生を考えるきっかけになればと思います。

・高知大学2年 鈴木 達也

「ふくしま子ども大使」は福島の状況をメディアだけで判断するのではなく、自分の目で見て知るというとても貴重な機会になったと思います。子ども達はまだ小学生でありながら、見知らぬ土地、見知らぬ人がたくさんいる場所へ、福島を知りたいと強く思い、参加したのだと思います。年齢の違い関係なしに、そのように行動できる気持ちは、自身も見習わなくてはいけないと思えるほど、とても尊敬できるものだと感じました。

《活動を終えて》

・プロジェクトリーダー 福島大学4年 太田 桜

この活動が行われるまで多くの課題と非難の声があった。しかし、それら乗り越えて活動できたことには大きな意味があったのではないかと感じている。この活動に参加を希望する県外の子どもたちから寄せられた作文の多くには

「自分の目で福島を見ていろいろ知ってきたい」という思いが書かれていた。きっとこの活動に参加してくれた子どもたちは福島のいいところをたくさん持って帰ってくれたと思う。それが福島を正しく理解することの第一歩に繋がっていく。そんな全国のふくしま子ども大使の子どもたちがこの活動で感じたことを忘れずに伝え続けてくれたらうれしい。そして福島の子どもたちは自分たちのふるさとのよさに改めて気づき、全国の子どもたちとつながりを持つことができた機会となったと思う。

こうやって少しずつでも全国と福島をつないでいき、福島のことを考えてもらうきっかけ作りを続けていくべきだと感じた。

【活動写真】

○仮設住宅訪問



○カヌー体験



○あかべこ絵付け体験



○さよならのつどい



○班での様子



○第4回ふるさとで過ごそう!!家族の夏

【概要】 東日本大震災の発生から約3年が経とうとしている現在も多くの方々が福島県外へ避難している。そのような状況中で家族に焦点を当てると、多くの家族の皆さんが離れ離れに生活しているのが現状である中には、祖父母に預けられている子どももいる。多くの家族が大変な問題に直面している家族のみなさんを支援したいと思い、アサヒグループ、JTB東北の全面的な協力のもと今回のキャンプを企画した。

【期間】 平成25年8月10日～8月12日 2泊3日

【場所】 会津高原リゾート会津アストリアホテル

【参加者】 参加者 28家族 117名
スタッフ 学生20名 アサヒグループ5名

【協力】 福島大学行政政策学類、アサヒグループ、
福島県南酒販株式会社、株式会社JTB東北

【内容】 さまざまレクリエーションを通じて家族どうしのふれあいや家族水入らずの時間を過ごしていただくことで家族の絆を再確認していただく

【行程】 8月10日（土） 飯盒炊飯（飯ごう、カレーづくり）
8月11日（日） のびのび運動会、さかなつかみ取り、芋ほり
日帰り温泉ツアー、キャンプファイアー、花火
8月12日（月） 木工体験、大内宿散策



【活動写真】



【感想】

【リーダー】 佐藤 元気（福島大学行政政策学類 3 年）

この企画は 2 月の中旬からアサヒグループさん、JTBさんと我々がミーティングをはじめ、6 月からスタッフを集めスタートしました。私たちは、家族のみなさんに楽しんでもらい、家族の絆をさらに強くしてもらうことを第一に考えさまざまなアトラクションを作ることにしました。しかし、参加者に年齢層が幅広いことや、アトラクションを行う場所の制約など多くのクリアしなければならぬ条件があり何度も何度も練り直しました。そして試行錯誤繰り返しながら老若男女広い世代の方々に楽しんでもいただけるものを作ることができ、キャンプ当日には家族の皆さんの笑顔や家族団らんのひと時を多く見ることができました。これを機に家族の皆さんの絆がさらに強くなり、今後先行きがわからない状況での生活の励みになれば幸いです。そして、この参加者の皆さんの笑顔を見ることができたのはスタッフの力がすべて結集したからだと思いません。

この企画に一から携わらせていただいて感じたことは、震災から 2 年半以上たった現在でも苦勞を強いられている家族のみなさんが多くいらっしゃるということです。この問題は今後も続いていくと思います。そのため、この方々に対する支援は今後も継続していく必要があると思います。そして、私はこれからもこのような活動に携わっていきたいです。

【学生スタッフ】 藤山 紗江理（福島大学行政政策学類 2 年）

私は、今回「ふるさとで過ごそう！家族の夏」にスタッフとして参加し、多くのことを学びました。まず、ゲームの企画や運営を行うことで、どうすれば参加者のみなさんに楽しんでもらえるのかを考えながら企画することの大変さと、スタッフみんなで協力して作り上げていく楽しさを知りました。また、当日は参加者のみなさんと一緒にゲームや芋ほり、魚つかみなどをして楽しかったですし、たくさんの笑顔を見ることができて嬉しかったです。参加者のみなさんとお別れするときに「ありがとう！楽しかったよ！」と言ってもらえたことが大変嬉しく、いまでも覚えています。参加者全員が笑顔になれるこのようなイベントを今後も開催してほしいですし、機会があればまたスタッフとして参加したいと思っています。

4. その他

○第1回ボランティアステップツアー

【概要】 東日本大震災の発生から約2年がたった時点で福島県の浜通りの現状を知ることの出来る機会が少なくなっていた。そういった現状も踏まえて、ボランティアツアーを行い、相馬市、南相馬市の現状を知ることのできる機会を生み出した。今回、企画にあたって福島市と相双地区で中間支援を行っている一般社団法人 Bridge for Fukushima 協力の下、NPO 法人相馬はらがま朝市クラブ、NPO 法人浮船の里にも後援をいただき運営することが出来たことを改めて感謝します。

【期間】 平成25年5月25日

【場所】 相馬市松川浦見学、南相馬市小高区見学

【協力・後援】 一般社団法人 Bridge for Fukushima
NPO 法人相馬はらがま朝市クラブ、NPO 法人浮船の里

【参加者】 学生 25名

【内容】

仮設支援を行っていくうえで、今現在その仮設に住んでいる人たちの故郷は、今どんな状態になっているのか。津波の現状も含めて、被災地の現状を知る。

【感想】 福島大学経済経営学類3年 熊谷 慎平

僕がやりたいと思った理由は、大きく2つです。まず、春休みに協力してくださった Bridge for Fukushima でのインターンシップ経験がありました。その機会に、僕ははじめて南相馬市の小高区に行きました。そこで感じた経験、福島市に住んでいる自分と同じ県で起きていることなのか、と本当に考えさせられました。

また、福島市に住んでいる僕ら大学生が相双地区に行く手段がありませんでした。まず、僕らが相双地区へ向かうためには、車がなければなりません。ですが、災ボラで所持している車は一台しかなく、毎週末にはその車を使ってしまったため、結果行く手段がなくなるのです。

もう一つは、福島大学は今後も継続的にボランティアをしていかなければなりません。そういった中で、震災当時を経験した世代は卒業していき、これが

ら入っていく世代は被災地の方々との距離をなんとなくですが、感じてしまう世代になります。メタ的ではありますが、「どうして、私たちはボランティアをするのか？」そういった問いかけができる機会や場が欲しいと思ったのが理由です。

結果的に、ツアーの工程上、うまくいきました。ですが、準備段階での広報活動、参加者の話しやすい場づくりなどは今後も改善していかなければなりません。もっと、丁寧に運営していくその重要性を感じました。

【活動写真】



○前橋芋煮会 2013

① 活動概要

群馬県前橋市国際交流広場を会場に、群馬県前橋市民の有志による団体「まえばし×ふくしま部」(よみ:まえばしふくしまぶ)が主催する「前橋芋煮会 2013」に協力団体として参加した。活動の目的は、1.前橋市民同士、前橋市民と福島県民、福島県に縁のある者同士等、多様な交流を図ること、2.福島を今を前橋市民に発信すること、3.交流によって得られるつながりを、福島に暮らす人々、福島を思いながら避難し暮らす人々の生活復興に資すること、4.福島の現状を伝え、福島の「元気」を発信すること、である。芋煮会の内容については、1.投げ銭制による福島風芋煮 500 食の振る舞い、2.参加団体によるフリートークショー、3.福島県産の果物の販売(りんご、梨)、4.福島の物産販売、5.福大災ボラの活動や被災地の写真の展示、6.群馬大学生と教員によるキッズコーナーの運営、などを行った。

② 日付(期間)

2013年10月26日(土)

③ 場所・開催地

群馬県前橋市 国際交流広場

④ 協力・共催

主催：まえばし×ふくしま部

協力：学生団体 福島大学災害ボランティアセンター

UDOK.(福島県いわき市小名浜のオルタナティブスペース)

福島リアル

前橋中心商店街協同組合

まえばし CITY エフエム (M-WAVE 84.5MHz)

群馬大学

前橋〇〇部

⑤ 活動人数

12名

⑥ 内容・行程

10月25日(金) …前日準備

10月26日(土) 8:00…国際交流広場前集合、準備開始

12:00～…前橋芋煮会スタート

(災ボラ担当：果物販売)

13:30~14:00…フリートーク登壇

17:00…芋煮会終了、片付け開始

18:30…片付け終了、撤収

⑦ 感想・考察

地域政策科学研究科 2年 川村 遼

「前橋芋煮会」は2012年度に第1回目を開催し、今回は2回目の開催となりました。

私は前回に続き、福大災ボラの前橋芋煮会担当リーダーとして事前の準備から当日の運営まで携わりました。芋煮会は、まず、本番前日の夕方から野菜などの下準備を行いました。災ボラからも7名が先発メンバーとして準備に加わりました。当日は朝から会場設営や芋煮の準備を行い、正午から芋煮会が始まりました。約500人分の福島風芋煮の振る舞いの他、りんご・梨といった福島の新鮮な果物の販売や福島の物産の販売が行われ、たくさんの方々が来場し会場は大盛況でした。また、芋煮会のプログラムの中に参加団体によるフリートークショーがあり、災ボラからも自分たちの活動についての紹介や福島の現状についての報告等をお話しさせていただきました。自分たちの話を真剣な表情で聞いてくださっていた来場者の姿が印象的でした。他にも、フリートークでは他団体の方々がそれぞれの視点から見た福島の現状や福島に対する想いを語り、来場した方々はみなさん真剣に聞かれています。夕方には、約500人分用意していた芋煮は見事に完売しました。今回は前回の芋煮会よりさらに規模も大きくなり大いに盛り上がったと思います。これも、まえばし×ふくしま部のみなさんをはじめとした前橋芋煮会に関わった多くの方々の協力があったからこそだと思います。是非、このような活動を今後も継続してしてもらいたいです。そして、私自身も福島の復興に少しでも役立てるよう今後も様々な活動に参加していきたいと思います。

○まえばし×ふくしま部 竹内 躍人

こんにちは！まえばし×ふくしま部の発起人の一人、竹内躍人です。

ぼくは、「前橋芋煮会隊長」として前橋芋煮会の企画運営をしています。まずは、なぜ前橋で芋煮会をやろうということになったのかについてお話しします。まず、「芋煮会」という食文化に、ぼく自身以前から憧れていました。みんなで大きな鍋を囲んで、具沢山の温かい芋煮を食べるということを、前橋でもやってみたかったのです。また、ふくしまには縁が非常に多く（縁の内容は書き出すときりがないので省略します...）、2011年から何度も足を運んでいます。災害ボランティアセンターの川村遼くんには当時からずっとお世話になっていて、そのなかでセンターに関わる福島大学の学生のみなさんにも顔と名前を覚えてい

ただけまして。もともと「震災からの復興」「風化させない」という想いのもとに活動をしたと考えていたぼくは、芋煮会への憧れとふくしまとの縁をきっかけに前橋風の芋煮をふる舞う「前橋芋煮会」を発案し、同時期にぼくの暮らす前橋で立ち上がった「まえばし×ふくしま部」を母体として実際に開催にこぎつけたわけです。その初回となった2012年の前橋芋煮会では、福島大学のみなさんに前橋までお越しいただき、一緒に芋煮を配ることが出来た感動は未だに忘れません。

それから1年が経過した2013年10月、なんと2回目となる前橋芋煮会が実現しました。「前橋芋煮会2013」では、2012年の芋煮会より3つの点でパワーアップすることができました。【1】前回は購入していた野菜やお肉を、ほぼ100%提供でまかなえたこと（前橋の農家やこんにやくメーカー、養豚協会などより食材をご提供いただきました）。【2】ふくしまから、「福島大学（福島市）」「福島リアル（郡山市）」「オルタナティブスペース UDOK. / かまぼこの株式会社貴千（いわき市）」の3団体の方が前橋まで足を運んでくださったこと。【3】投げ銭を「83,889円」と前年よりも3万円ほど多くいただけたこと（芋煮自体は無料で、お気持ちを投げ銭としていただく仕組みになっています）。また、「福島リアル」さんとの関係から「有限会社ミドリヤ」様より「みのり納豆300食」もご提供いただきました。ここに書き出しきれないほどにたくさんの方々にお世話になり、無事2年目の芋煮会を終えることが出来ました。こうしてある程度の規模感（500人前の芋煮会）をもち、実際にふくしまで生活・活動するみなさんを前橋にお呼びするような企画を開催することで、前橋市民が3.11のことを思い出し復興にそれぞれの方法で参加するきっかけになってほしい。また、それだけではなく、前橋市民の防災という視点でも一石を投じていきたい。前橋芋煮会という動きは、市民同士のコミュニケーションを生んだり、ある意味炊き出し訓練のような芋煮会であったりもするわけです。

東日本大震災について、日本中でどんどん進む風化。前橋も全く例外ではありません。そのなかでも「まえばし×ふくしま部」「前橋芋煮会」をひとつのきっかけとして、ふくしまの現実も、それから美味しいふくしまや楽しいふくしまも、いろいろなふくしまを前橋のみなさんに知ってほしい。そして自然災害について自分ごとの意識をもってほしい。そういう一心でぼくたちは前橋で活動をしています。2014年以降も「まえばし×ふくしま部」らしい様々なかたちでふくしまを想う活動ができたらなと思います。最後に。ぼくたち「まえばし×ふくしま部」の部員は、ふくしまへ行く機会が意外と多いです。その際は、あたたかくお迎えくださると嬉しいです。これからも「まえばし×ふくしま部」をよろしくお願いします。

【資金関連】

収支決算報告

(2014年1月31日現在)

収入の部

項目	金額(円)	備考
運営費	1,173,176	災ボラウイーク売上げ ポロシャツ売上げ 寄付金
サマーキャンプ	5,000,000	JTB
立て替え収入	256,398	
芋煮	83,200	住民参加費
合計	6,512,774	

支出の部

項目	金額(円)	備考
運営費	84,226	文房具、名刺、インクなど
サマーキャンプ	3,547,569	交通費、宿泊費、名札など
家族キャンプ	52,317	交通費、宿泊費、名札など
大使キャンプ	46,130	交通費、宿泊費、名札など
足湯	5,595	飲料、お菓子など
花見	91,615	食材、飲料など
流しそうめん、夕涼み	74,232	食材、調味料など
芋煮	130,239	食材、調味料など
クリスマス、望年会	122,416	食材、プレゼント代など
その他の活動	104,866	食材、薪など
旅費・交通費	135,252	宿泊代、高速代、バス代など
通信費	2,310	切手代、速達代、年賀状など
合計	4,396,767	

寄付金一覧

(2014年1月31日現在)

日付	金額(円)	備考
5月 7日	10,000	オオツマユ様 寄付金
6月 7日	200,000	前年度収入分あぶくま基金
6月 7日	1,011	あぶくま基金用通帳より (後日学生返金)
7月 4日	140,000	匿名様 寄付金
7月 16日	86,064	石川酒造様 寄付金
9月 24日	100,000	ミナミミツオ様 寄付金
9月 24日	50,000	マツイタツオ様 寄付金
9月 26日	5,000	サイトウ様 寄付金
10月 11日	10,000	松川いいたて夕涼み会 謝金
10月 18日	5,000	佐藤愛様 寄付金
10月 24日	64,779	石川酒造様 寄付金
10月 29日	5,000	サイトウ様 寄付金
10月 31日	150,000	JTB
11月 14日	20,000	前橋ふくしま部 様より
11月 14日	15,400	前橋ふくしま部 様より
12月 18日	5,000	サイトウ様 寄付金
1月 7日	31,217	高知大学様
1月 21日	5,000	サイトウ様 寄付金

おわりに

ゼネラルマネージャー 菅野 貴大
(行政政策学類 3年)

私は震災が起きたその年に福島大学へ入学をしました。入学後は福島県のために何かをしたいという気持ちはありましたが、何をしたらよいか分からず、ただ学生生活を送っていました。そんな時にこの災害ボランティアセンターと出会いました。福島市内にある仮設住宅を訪れ、足湯活動などを行っているうちに顔なじみの住民の方も増えていきました。訪れるたびに笑顔で出迎えてくれ、とても楽しく活動もできました。私自身、被災した結果、震災の恐怖というものを感じましたが、このような活動を通して人と人とのつながり、優しさ、ぬくもりを改めて感じることができました。

災ボラが設立されてから 3 年が経とうとしています。仮設住宅での活動も 1 年目と変わらず、継続的な支援を続けてきました。足湯や季節ごとのイベントを行い、お話や一緒に活動もしてきました。学生が来ることをとても楽しみにしてくれていて私たちも、とても嬉しく感じていました。ですがその笑顔の裏にもこれからの生活に対する不安やストレスがまだ隠されていると思います。これからも継続的な活動を続け、住民の方の声に耳を傾け、少しでもそれらを解消したいと改めて感じました。

今年度は浜通り支援にも力を入れ、瓦礫撤去、家屋の荷物整理などを行ってきました。県外からも多くのボランティアの方が来ており、一緒に作業を行いました。何度か訪れた場所ではありますが、放射能の影響もあり瓦礫の処理などはほとんど進んでいない状況でした。

昨年度と同様に今年度も子ども支援としてリフレッシュキャンプ・学習遊び支援を行ってきました。震災によって離ればなれになってしまった家族が再会し一緒に時間を過ごすキャンプや外でなかなか自由に遊ぶことのできない子供たちを県外につれていき、思いっきり遊んでもらうキャンプを行いました。また今年度は県外の子どもたちを福島県に呼び、子どもたち同士の交流に加えて福島県について知ってもらうキャンプを行いました。現在の福島県を子どもたちに知ってもらい、正しい福島県の姿を周りの人たちにも伝えてもらうこと、またここでの交流が数年後の福島への偏見を少なくしてくれるだろうという目的で行われました。このキャンプを通して福島県の未来について思いを馳せることが出来ました。数年後の福島県もこれまでのように笑顔のあふれる地域であることを祈りたいです。

この他にも、これまで様々な活動を行う中で、多くのつながりも作る事ができました。県内だけでなく全国各地の学生や企業、NPO の団体、個人等々の方の協力があつたからこそ数多くの活動が実現できました。皆様と活動を行う

ことで私たち自身、多くのことに気付かされ、大変な刺激になっております。多くの方に参加して頂くことで震災の風化防止につながっていくと思います。

また、活動をするための資金や物資を送って頂いたりもしました。活動は私たちが資金や物資集めを行うため、私たちの活動を理解して頂き、企業や個人から資金や物資の支援をしていただけることはとてもありがたいことです。この場を借りて御礼申し上げます。

最後になりましたが、私たちと一緒にあって、活動、あるいは後方支援してくださいました各大学学生、大学関係者様。活動について詳しく取り上げ、あらゆる媒体で広報してくださいました各メディア関係者様。活動協力に加え、報告書制作にあたりご執筆くださいました各団体、個人の皆様。本当にありがとうございました。ご協力くださったすべての方々の名前を列挙することが出来ず大変申し訳ありませんが、皆様の支えがあり私たちはこのような報告書を制作することができました。心から御礼申し上げます。

今後とも私たち「(学生団体) 福島大学災害ボランティアセンター」をよろしく願いいたします。